

勞農露國労働組合發達史(三)

赤松克麿

第四節

第三革命時代(三月革命と十月革命)

一、労働組合と兵會

歐洲大戰の進行と共に露國國內の形勢は頗る不穩となり、省府や諸州の各都市に於て、專制政治倒潰の闘争が漸次進歩し而して此の闘争の中堅として勞兵會(勞兵會若しくは勞農會とは社會黨の支配を受けた民衆的政治機關である)が廣く起つてあつた時、労働組合も亦同時に組織されつゝあつたのである。一九一七年三月十五日、廿二個の労働組合の幹部がモスクワに會合して、労働組合會議を創設した。それと同時に、トバラドにも労働組合會議が創設された。一方、この間があつても、一部分のものであり、若しくは工場協同的の機關があつて、既に労働者の爲の機關ではない。そして今まで運動の發達を妨げ、地上に踏を阻んでんとする労働運動の萌芽を踏んだものは實に此の地方に於ける資本家の頑迷無智と官憲の壓制機關であつた。また資本主義的組織の生産が、生れ、餘り口數を經て居ない結果、因襲と傳統が、今に地方人の労働者の頭に深く浸み込んで居ると云ふ事も有力な一因である。例へば昨冬の始めに起つた此の地方で鐵工業界に勢力を有する處の愛知時計電氣株式會社の罷業に於ける資本家の態度は、明かに此の地方の資本家の處理を代表して居るものと見る事が出来るのである。職と僱との爲めに自己の生存を脅されて、資本家と職人に至る事は、從來の多くの罷業に於て見る普通の現象であるが、此の會社に於ける罷業の原因は、労働者の相互救濟機關(儲蓄會)が會社員(技師技手組

持下
手紙
一月
心
下